



川崎和男が キター!

鼎談 川崎和男 × 森田恭通 × 長友啓典

「あのさ、川崎和男さんと呼んで、友さんと鼎談するって、どう?」と、モリタ氏からのご提案。川崎和男って……あの川崎和男!? いまや、その異能ぶりは、インダストリアルデザインという枠を超えてどこまで広がるぞ!? である。交通被災により車イス生活の「身体障害者1級」に、さらには心臓病で、「ICD埋め込み」「心臓障害1級」のカラダにもかかわらず、人工心臓や医療機器・環境デザインと、その領域は拡大し続けている。「柔のモリタ」が何ゆえに「硬の川崎」をこの連載に招聘するのか。青山に移転したばかりの真新しいGLAMOROUS II グラマラスのオフィスに、「いよお!!」と声も高らかに、川崎和男氏がやって来ました。さて、どないなことになるのか? 想像もつかないデザイン鼎談。ところで皆さん、失礼ながら、あなたは、川崎和男というデザイナーをご存知だろうか。

文・構成／柴田常文

あまりにも数奇な人生。

川崎 28歳の時、交通事故にあつて、車椅子になったんですよ。僕はよく交通加害者に間違われるのだけど、被害者なの(笑)。車椅子に乗って来年で40年になるんです。

長友 そうですか!

川崎 親父がどうしても福井に帰ってこい、と言うので帰りましてね。金沢美大の非常勤とかやって、それで、あんまり勤めたくもなくて、なんかかんや言っているうちに、45歳の時にこんどは心臓を悪くしましてね、倒れて162日間入院しました。でもコンピューターのことか忘れられなくて、「先生、僕もう一回、大学人になる」って言ったら、「やっとお前、その気になったか」って言われて、あの国立大学に行こうかなって思ったんですよ。そしたら「そんな大学なんかに行

行ったら、イジメられるだけだ」って言われて(笑)。名古屋市立大学に芸術工学部が出来たので、そこに入りました。で、そこに10年いまして。それから、いろいろまた、ケンカもしまして(笑)。

森田 暴れん坊だからねえ(笑)。

川崎 それから大阪大学大学院に行つて、63歳の時に定年退職。それから3年契約で仕事をやっていたんですけど、2年でイヤになりました。「どうせやるんだったらデカいことがやりたい!」って言ったら、「そんなの前例がない!」って言われて、「前例がないから、俺がやる!」って。その時は工学研究科にいたんですけど、いまは医学系研究科にいます。今年で2年目ですね。あと2年やるのかな……。医学系は定年なしだって言われて、なら最後までつくそうかな、って最近は思ってます。

長友 いいですね〜! 最後まで、って

とこが。

殴られて、育つ。

川崎 僕らの時は「インダストリアルデザイン」という一冊だけ、そんな本しかなかった。あとは建築の本。それしかないわけですから。その本持つてる奴、机の上に出せつていうわけですよ。全部集めて火にくべる!

全員 え〜ッ(笑)。

川崎 そういう時代に育っている。あとは殴られて育っているわけですよ。美大に入った時、ここは職業訓練学校か!? ってね。先生が課題だしておいて、下宿で課題やらなきゃと思っていると、先生が来ちゃう。それで明け方4時くらいまで酒を呑んでいく。それで、じゃ帰るって。先生と一緒に課題やらなくても大丈夫だろうと、そのまま授業に出ると、はい、課題提出! やってない奴は前へ

やわらかな夜を……



マーメイド

出る！ で1人ずつビンタですよ。何なんだよ、前の晩に呑んでベロベロになっても、次の日が締め切りなら、何が何でも出さんだ！ というトレーニングだつて(笑)。そういうところで学んできているからね。それが身につけているから。いままも産業デザイン振興会とすごいケンカをしてしまっています。「日本デザイン振興会」と名前を変えて公益財団法人になる前に、「川崎帰って来い」って言われて、その時テール叩いて「デメーらぶざけんな！ こんなことやっているから日本のデザイン界は靖国にいけねーんだ！」って俺、言ったんですよ。そして、「川崎に一言だけ言う。おまえな、気持ちはわかるけど、靖国神社を出すだけはやめろ！」って。そんなことばっかりだもの(笑)。

川崎 いまは、プロダクトデザインといえますけど、僕らの時には工業デザインです。僕の先生っていうのは柳宗理(※1)なんですよ。無茶苦茶なわけですよ。あの人は。例えば、「亀倉雄策、何だ、あのポスターは！ スポーツの瞬間を撮ったかも知れないが、何なんだ最後の足は！」って、そういう話を聞いているわけですよ。「丹下健三のあの建物なんかなってねー！ 中のインテリアを俺がやったからいいんだ！」とか、そういう話ばっかり(笑)。それから考えると、なんでなんだろうなあ？ 今回の五輪エンブレム案が決まった時、こんな違うよな、こんな恥ずかしいよな、って言っていたら、モノマネだつて！ それからみると、まだ原研哉氏(※2)のやった作品の方がまともですって。次にみんなから応募したやつ、ロクなものがない！ 僕のフェイスブックにシステム上限5000

人のフォロワーがいるんだけど、そのうち1100人くらいが原研哉氏のいいと言っている。何のチカラにもならないかも知れないけど、ね。

森田 インテリアも深刻な問題を抱えていると思います。いいか悪いかわかりませんが、例えばクライアントさんが、この店繁盛しているよってデザイナーを連れて行く。そこで、これと同じようなものにしてくれば、依頼するとしたとす。そんな時デザイナー側からも断つてもいいと思うんです。が、そのまま受けざるをえない場合もあるようです。まあ、もし同じようなデザインだからといって仮に訴えたとしても、裁判までの手続きの間に次の店が出来ちゃうので、もう次のステージにいるからいいや、と思うしかない(笑)。ただ、このお店どこかと似ているデザインだな、と気づく一般の方々も次第に増えていってしまっていますので、皆さん目が肥えてきていってしまっていると思います。

——著作権はつけられるんでしょう？

川崎 つけられます。エンブレム問題の時、◎が付いていたからベルギーに負けたな、って思いましたよ。自分で全部◎付けちゃえばいいんですよ。権利は全部で5つあります。著作権、商標権、工業意匠権、それから特許権に工業所有権。——そんなにあるんですか！

川崎 ところが著作権は無作為ですから、◎付けたらおわりなんです。特許権、工業所有権は理科系。著作権、商標権は文科系。工業意匠権は芸術系なんです。ここは、文科系も理科系も一緒に入ってくる。僕はこれを、「コンシリエンスデザイン(※3)」と呼んでいる。それがいろいろの問題であって、デザイナー自身がそのことが分かってない。工業意匠権で闘っても負ける。著作権で戦えど。そのためには、図面に必ず◎を入れる！ 森田 そー！ うちに入れてますよ！

川崎 それを入れておけば、描いた時点でその人のものなんです。そういうことをデザイナーはもっと知らないといけない。だから、商標権でがんばるのはアホ。向こうは頭が良くて、著作権で闘うといてる。そこで、負けです！ その辺がなんか欠落しているんです。いま、慶応に行きながら桑沢デザイン研究所に行ったりする学生が出てきます。そういう連中はエンジニアでもあるし、Wスクールに行っている彼らがこれからはイチバン強いんです。

長友 コリヤ、グラフィックがイチバン遅れている(笑)。やっぱり、若い子がやりたくなくなるのは分かるなあ。

森田 減ってますか？

長友 減ってますよ。川崎さんのお話を聞いていると、お金の動き方が違いますもん。今度のエンブレムだって、あんな大仕事でたったの100万円でしょ！

1000万円でもいい。それを何にも言えない環境。

川崎 何ですかね？ あんな問題が出た時に、なんで100万なんだ!? って抗議しないのか。

長友 アメリカからも文句が来たらしい。恥ずかしいですよ。

川崎 僕がもうちよつと、原研哉氏と仲がよければいいんですけど……(笑)。

森田 慕ってくださいよ。

長友 彼なんかがイチバン言わなければ

※1 柳宗理(やなぎ・そうり) / 1915年東京生～2011年。1950年～60年代、日本の戦後復興期から高度成長期にかけて、日本のモダンデザインを先進的に牽引したデザイナー、永年にわたり金沢美術工芸大学でデザイン教育にも力を注ぐ。

※2 原研哉(はら・けんや) / 1958年岡山県生。グラフィックデザイナー。武蔵野美術大学造形学部基礎デザイン学科教授、株式会社日本デザインセンター代表取締役。今回の東京五輪エンブレムの最初のコンペで次点となった自身のデザイン案をWebで公開した。

※3 コンシリエンスデザイン / 「危機管理論」ではなく「学術+芸術、文系+理系の統合」構築のために川崎教授が提唱するデザイン論。難しすぎて簡単には解説できないので、興味のある方はご自分で調べてください。

いけない。

川崎 河北さん(※)なんか、芸大にいたんだから、がんばらないといけない。いっしょに俺だつてがんばるから。あんな公募、恥ずかしいですよ。朝顔、ふざげんな！ 市松、暗くてダメ！

長友 普通の会社のマークでも、ちょっと社員に聞いてみますでしょ。社長が決断できない。本当はモチは餅屋にまかせて、社長がOK！ っていうばいはいんですよ。

川崎 いまみんな争い事を好んでないから、誰も言わないですよ。僕もね、ここまでが精一杯、これ以上は、ね。

——川崎さん、お若く見えますね。

川崎 去年は54歳で通っていました。

長友 54の人から靖国は出てこないでしょ(笑)。

川崎 僕が大学人になって、中国の大学がアジアデザインセンターというのをつくったんですよ。で、作品を貸してくれと言ってきた。貸したんですよ。返って

こないですよ。それで返してくれ！

って言ったら、もらったって言うんです。だったら、講演にきてくださいって言うんですよ。レジメくれて。分かった！ 靖国問題、教科書問題、慰安婦問題、南京大虐殺問題、って書いて出したら、来るな！ って言われた。

全員 (爆笑)。

森田 誰もが踏み込んだじゃないところに踏み込みますからねえ、先生は(笑)。

独学、独歩。

——コンピューター、医学、川崎先生はすべて独学ですよ？

川崎 デザインが医学の世界に入っていくことは、すごく重要なんです。

森田 誰も入ったことのない世界ですものね。

川崎 2020年には僕らの世代が706万人になるんですね。介護士が170万人必要になる。2025年には

かわき 也(かわき) / 1947年、大阪府茨田町生まれ。1971年、大阪芸術大学芸術学部デザイン学科卒業。その後、大阪芸術大学で講師を務める。現在は、大阪芸術大学で教授を務める。代表作として、『あひつ』、『ポールペン』、『ハツカネズミの心臓』などがある。

介護士が240万人足りないんですよ。それをなんとかしなければならぬ。

——医学とデザインの融合……。

川崎 スタッフに「あいつ、ボールペンをやったらいいぞ。あんなモン、ボールペンじゃねーぞ。俺のところにボールペンの仕事はこねーのか!? っていうと、「来るわけないでしょ！ みんな怖がってきませんよ」

「なんでウチらの仕事は、いちいち人の論文を全部読んで、医学とか資料もないのをやらなきゃいけないんだよ」って言ったたら、「そんなこと、僕らが聞きたいですよ」だって。ハツカネズミの心臓50個に、みんなそこで電極板を貼っているわけですよ。貼りながら「先生、こ

れってデザインですよ？」って聞かれます。「そうだ！ これがデザインだ」って。阪大の教え子たちはみんないいですよ。優秀です。

——その心臓50個でどんなものをつくらうとしているんですか？

川崎 腿の筋肉を培養して心筋シートにして、心臓移植をしなくても大丈夫なように、ね。心臓は動いている、そこに培養した薄い膜を張る。胸の筋肉でフタをする。時間もかかる。それを早める技術を開発しています。でも日本デザイン学会だとお金が降りてこない。それが日本人工臓器学会だつたりすると研究費が出る！ いろんなことをやっていますよ。モーツァルトの音楽をかけてみたり……最後に気がついたんですが、骨が折れた時に、超音波の1500ヘルツをかけるのと、骨のくつきが早いんですよ！ それを学会で発表するわけです。デザイ



かわさき・かずお(写真左) ●1949年福井市生まれ。B型・左右利き。デザインディレクター。大阪大学大学院医学系研究科寄附講座特任教授・博士(医学) / 大阪大学名誉教授・名古屋市立大学名誉教授 / グッドデザイン賞審査委員長など行政機関での委員を歴任。国内外での受賞歴多数、海外の主要美術館に永久収蔵、永久展示作品多数。

ナーが負ける理由は何かというと、強いのは絵が描けること。これはメチャクチャ強い。だけど、論文が書けない。絵と論文さえあれば、文科省ぜんぶOKなんです。このコツを知ってしまえば、なんでもない、と声高く言っているんだけど、ねえ。

——お話は前後しますが、大学を卒業して最初は東芝に入社なさいましたよね？

川崎 東芝に入った時に、第三志望までオーディオって書いたら、おエライさんが、そんな奴はいらないって言ったんです。仕方ないから、その翌日に辞表持って行ったんですよ。そしたら、違うおエライさんがそういう奴が欲しい！ となった。僕はオーディオしかやる気がなかったから、洗濯機なんかクソ食らえって。ずっと、オーディオだけやってたんですよ。「Auxo II オーレックス」のロゴタイプは僕ですし、ジャズコンサートの企画書やショールームのデザインも僕なんです。いちばんやった時にはAuxo商

品の8割くらい、僕のデザインなんです。今も、大学辞めたらオーディオの会社をつくりたいんです。

——そのオーディオも独学ですよ？

川崎 卒業制作もオーディオだった。音楽家になれなかったんで、ちょうどシンセサイザーが出てきた頃で、楽器が弾けなくても出来るんだ！ ってそれをやろうと思った。「お前どこ行きたい？」というから、「音か光をやりたい」って言ったんです。「ちょうどいいや、東芝に行け」嫌だ、そんなとこ」って。川崎重工が給料も良かったし、名前も川崎だからいいや、って思ったり、キヤノンが伸びると思ったから、それを持って主任教授のところに行った。「そうか、会社見つけたか！ どっちも受かるだろう。でもな、川崎、受かっても卒業できないから」って言われた。「何ですか」って聞いたら、「お前はもう東芝に決めたから」って。そういう時代ですよ。

——新しい分野にチャレンジしていく時

す。前にイェール大学出身の記者が来日した時に、川崎さんってレオナルド・ダ・ヴィンチですね、って言われたんですよ。「違う」って言ったんです。俺の方が上手い、って。

全員（大笑）。

川崎 アメリカで展覧会をやった時に、言われたことがあるんですよ。質問されても英語がよく分からないから、聞く方に回っていた。そしたらギャラリーのオーナーに呼ばれて「お前は何しにNYに来たんだ？」「展覧会をやりに来ただけだって言ったんです。「違う！ 海外は売名行為なんだ」って。それで僕は変わって。売名行為に徹しなきゃ、海外では勝負できない。

森田 まず知ってもらわないとね、スタートしませんがね。

大学というところ。

川崎 ご存知かどうか分かりませんが、日本の大学ってところは、私立、公立、国立であるじゃないですか。科学研究費っていうのが学術振興会から出るんですよ。200万から2000万円ぐらいの幅で。阪大ぐらいですと、それに助教が応募する申請書を添削するんですよ。そうすると、僕はデザイナーだから、法学部から経済学部から医学部から工学部まで全部見ることが出来るんですね。大体分かるんですよ。ここをこうしたら200万の研究費が2000万ぐらいにはなります。デザイン界はもっと総合大学に行くべきです。

森田 デザインが身近になったのはいいと思うんですが、プロダクツやインテリア、ファッション、デザインが生活と結びついて、みんなチョイスできるようになってきた。趣味カテゴリーが増えてきて、だんだん目も肥えてきて、デザインが日常のものになってきた。ただまだ見栄えに捕われてしまうこともある。本来の川崎さんがおっしゃっているようなデザインのレベルまでは、まだ、みんな到達していないですよ。だから見た目の美しさだけで判断して、そのあとのストーリーまでを把握するのは難しい。

川崎 僕は3つ決めているのね。1つは問題解決。応答・回答・解答をちゃんと見つけてくる。では価値って何だ？ 答えられる人がいない。2つめ、価値というのは「望ましいこと」と「好ましいこと」。そして3つめは、未来が見えてくること。これをちゃんとと言わないとつまでたつても、デコレーションの間違われる。デコレーションの時代が長かったから、普遍化したのはファッションだと思っんです。三宅一生さんが最初にブリーツプリーズをやった時に、イチバン最初に僕が評論を書いたんですよ。デザ

つお松岡正剛（まつおせごう）／1944年京都府京都市出身。日本文化研究社、東京大学大学院教授、帝塚山学院大学、株式会社松岡正剛事務所代表取締役、編集工学研究所長、ISIS編集学校校長。

に、どうやっていくんでしょうか？

川崎 本ですね。その辺けっこう真面目なんです。僕（笑）。

——そのジャンルの本を読み漁るわけですか？

川崎 読書量は松岡正剛氏（※5）も認めているんです。

森田 それはスゴイ！

川崎 メガネのデザインをもう30年以上やっています。眼球を解剖で半分に割ったものを見ているのは僕くらいですよ。多分、目の筋肉なども触ってますから。

——そういうことで知ると、デザインは違うものになってきますか？

川崎 違うでしょうね。やっぱり、レオナルド・ダ・ヴィンチはスゴイと思いま

インは問題解決だ。それを言葉ではなく、ファクションであらわしてしまっただ。

工学部に設計工学というのがあって、設計工学という言葉に誤魔化されている。例えば、車の企画をやっている旧帝大出の連中が、僕に尋ねる。なんでデザイナーの机が僕らの3倍も大きいのか？あのメーカーのデザイン部門にはスターバックが入っている、何でなんだ？と。カンタンだ！と。君らが問題に思っていることを僕は全部絵にできる。数式なんかにしてない。数式が出来てヒット商品ができるなんて大間違いだ。お前どこを出たんだ？って聞くと「設計工学です」「役に立つか？」役に立ちません」「そうだろう！みたいなね。数学の問題が気に食わないと、「いつまでこんな問題出しているんですか」って言うたら、みんなが白い目で見ると、僕は美術学校出ですからね。「おまえな、それは俺たちに対する嫌味か？」っていうから、「嫌味です」って言いましたよ。

森田 たのしかったですね。いろんな話が出て。特集ものですね。川崎さんのことを「デザイナー川崎」で見ちゃいます。「みんなが思っているデザイナーはデコレーターだよ。本当のデザイナーは違うんだ、闘わなきゃいけないよ」って、そこが尊敬するところですね。長友 モリタが行く！を助走にして、川崎も行く！も(笑)。

川崎 僕は闘っているつもりはないんだけど、いつの間にかそうなっちゃって、なんとなく、最初学校に入った時に思ったんですけど、金がなくなると、先生のウチに行ってたんですよ。その先生は日展系の画家で、奥さんが「はやく色紙を描きなさい」と催促するわけ。すると、「おい川崎、台所に行ってジャガイモとか人参とか持って来い」って、それを並べる。ササッと描いて落款を押す。で、先輩が「昨日先生、なにやってた？」って聞くから、「いや、色紙10枚くらい描いていたかな」って言ったら、「エ！色紙1枚10万円だぞ」って。初任給が4万円くらいの時代ですからね。現金製造機か！いずれ俺もああるんだ、と思っただ(笑)。

——思っただですか！
川崎 美大に入った時に、お前はこれで生きていけるって言われたからね。僕はコンピューターの世界に入ったのは早かった。でもこんなに早く変わって行くんだ。どんどん人がダメになっていく。それもわかってきた。もはや、ともかくコンピューターの前に座るな！です。コンピューターの前で考えてはアカンと。その事をずっと言ってきました。僕はほとんど手書きスケッチです。アナログとデジタルでは、やっぱりアナログが強いんですね。
森田 コンピューターって作業はしてくるけど、考える事はしてくれないですからね。うちのデザイナーにもよく怒る

「デザインに夢はないのか？」

のは、ずっとパソコンの前に座って世界中のデザインを見ているけど、それだけじゃダメだ、現場を見て色んなこと感じてこい！って(笑)。

長友 ン〜む、参ったな。やっぱり物凄く遅れます、グラフィックは。

川崎 いまのグラフィックデザイナーは基本を忘れてしまいましたね。

長友 最初、突っ走っていたのに気がついていたら、上を飛び越えられている。それでも走っているから、なんかおかしくなっている。まず今のままでは、子供たちがグラフィックデザインに憧れなくなってしまう……。

川崎 3・11が起った時に、子供達になりたい職業というのを選ばせた。第1位がアスリートなんです。サッカーとか、お金を稼げる。世界的に有名になれる。野球選手もそう。で、二番目はアイドル歌手なんです。三番目は消防士

とか自衛隊員。そこに建築家もいなければデザイナーもいない。こんなことあるか!? はやく見せてあげないと、これがいまの日本のデザイン界のマズイところ。いま自分が手がけられるのは、そこしかないから。いまも阪大で闘っているのは、何とかデザインセンターってところ。やたら、多いんですよ。ふざけんな！何でもカンタンにデザインって言葉を使うな！って。デザインとつければ人が来る、とかね。それがホントにヤバイなって思っていて。カンタンに使われ過ぎなんです。

長友 やっぱり、憧れの人がいるんですよ。そういう人がいない、知らない。誰がどういう作品を作っているかも教えなくなつた。

森田 新地にも銀座にもデザイナーが出てないし！
長友 それ、問題や(笑)！

森田 ナイトシーンに遊びを作ってきたのがデザイナーでもあるんです。それが、飲む、飲まないは別にして、そういうところで色々学んできた。いまは、何でそんなところに行くの？って聞かれる。じゃ、お金を逆に何に使っているの？って聞くと、何だろ？釣り道具かなとか(笑)。いいんだけど、色気はない。色気ないなあって。デザイナーは色気があるべきだと思う。だからその下にいる者も遊ばない。これ、ボスの責任でもある！川崎 連れて行かないし、誘うとイヤというし。物欲がないし。



森田 僕ら物欲の塊ですもんね(笑)。
川崎 モチロン、物欲の塊です。
もりた・やすみち●1967年大阪生まれ。インテリアに限らず、グラフィックやプロダクトといった幅広い創作活動を行っている。

伝えるしくみ、動かすちから。

株式会社 千修